8/29 赤旗

生活保護現場で好評

漫画『健康で文化的な最低限度の生活』

生活保護を正面からとらえた柏木ハルコさんの漫画が話題を呼んでいます。タイトルはずばり、『健康で文化的な最低限度の生活』。週刊『ビッグコミックスピリッツ』（小学館・20万部発行）で連載中です。（岩井亜紀）

柏木ハルコ作『健康で文化的な最低限度の生活』©週刊『ビッグコミックスピリッツ』

実態リアル

障害や高齢

主人公は、新卒で地方公務員になった義経（よしつね）えみる（23）。配属先は福祉事務所。知識も経験もないえみるが、先輩職員に支えられ同期職員と切磋琢磨（せっさたくま）しながら、担当の生活保護世帯に全力で向き合います。

75歳祖母と小4の女の子の2人世帯。祖母に認知症の症状が出始め、経済困窮を解決するだけでは済まない気配です。

「稼働年齢層だから」と、ある利用者への就労指導で判明したことは―。

柏木さんは約2年間、保護利用者をはじめ、生活困窮者の支援団体や福祉事務所、ケースワーカーなど取材を重ねました。「生活保護をテーマにしようと構想し取材するまでは、保護利用の理由は『お金がない』ことだけだと思っていました」

「実態は、そう単純ではなく、さまざまな要素が絡み合っていました」。障害があったり、高齢だったり、選択肢がなくブラック企業で働いたけど首になる…。

中学を不登校になりがちだった20代男性は、10代で上京して以降、友人宅を転々とし路上生活の経験も。就労経験がほとんどないけど条件の良いサラリーマンになりたいと空回り。

DVで離婚

柏木さんは「働くこと、生活することへのリアリティーを持てないでいる。彼のような人には、支援する伴走者が必要なんだと思う」と話します。

作品にはDV（配偶者や恋人からの暴力）が原因で離婚し、保護を利用する母親が登場。「働く意欲は十分あります！」と仕事をかけもちします。

アシスタントの1人は「メディアに出てくる利用者のイメージと違った」と驚き、登場人物に共感したといいます。

「生活保護を受ける多くの人たちは、やむなくそうなったのだと取材を通して感じた」と柏木さん。

漫画家として約20年、自身の恋愛や性の問題を表現してきました。東日本大震災をきっかけに、社会問題に目を向けるようになり、挑んだ作品です。

ビッグコミックスピリッツ編集部の豆野文俊さんは「反響はいいです。特に、ケースワーカーなど現場の人たちからは好評。アンケートからも読者の関心の高さが感じられます」と絶賛します。

単行本第1巻が29日、発売されます。